冥談

庭のある家　005
冬　039
凧の橋　073
遠野物語より　115
柿　145
空き地のおんな　179
予感　211
先輩の話　243

装幀　坂野公一（welle design）

庭のある家

庭には椿が咲いていて、その横の植木鉢を置く木製の台は燻んだ灰色だ。
台の上には何も載っておらず、欠けた植木鉢は地べたに並んでいて、雑草が少し生えている。植えていた花だか木だかは枯れてしまっており、それでも植え替えるでも引っこ抜くでもなく、枯れたまま放置してあるのだ。
台の方はもう風雪に曝されてすっかり傷んでおり、触ると壊れるのではないかと思える程だ。こういうのを朽ちている、と云うのだろう。色も脱けている。雨に濡らされ、陽に乾かされ、風に撫でられ雪に苛められて、もう瀕死の体である。
一方椿は艶艶している。
葉は厚く色も濃く、花は毒毒しいまでに紅い。
椿は生きていて、台は植物としては死んでいる。その差なのだろうか。
否、台の方は植物として死んでいるだけでなく器物としても死にかけているのだ。
こうなると、もう直しようがない。

割れた欠けたは補修出来るが、朽ちてしまっては手の施しようがない。この台の材料になった樹木は、間もなく二度目の死を迎えようとしているのだろう。

あのまま、腐ったり崩れたりして、無用の塵芥になるのだ。乾いているように見えるが、きっとあの台は燃えないだろう。だから焚き付けにもなるまい。表面はからからに乾燥しているけれど、きっと裏側は湿っているに違いないのだ。虫も涌いているかもしれぬ。石の裏側なんかにうじゃうじゃいる、あの鬼魅の悪い虫が。

そんな匂いだ。この庭は。

余り好きじゃない。

椿の背の塀も木製だ。

こちらは台程は傷んでいない。色もまだ樹木らしさを残しているし、風合いも木のそれである。同じ死んだ木なのに、随分と違うものだ。塗料の差か。それとも材料になった木の種類が違うのだろうか。

そんなことを思っていると、小山内君が戻って来た。

小山内君は高等学校の教員だ。ただ、重い胃病を患っていて、今は休職中である。元元痩せていたのだけれど、今は粥しか喰えないのだそうで、その所為か酷く痩せ細っている。顔色は青いと云うより土気色で、髪の毛も脂気が抜けてぱさぱさだ。

「何だね、君が庭を観るなんて珍しいじゃないか」

小山内君はそう云った。

「そうかな。まあ別に庭を愛でていた訳じゃあない。ただ外を眺めていた」

「外じゃない。そこは家の庭だ」

「建物の外に違いはないだろう」

「違いはないが、囲いがあるからね。囲いの先は見えまいよ。君には庭しか見えぬ筈さ」

随分と庭に拘泥るものだ。扨は自慢の庭かと問うと、小山内君は大いに笑った。

「何処が自慢なものか。児童の頃から見慣れてはいるが、正直云って大嫌いだ。そこの、踏み石の処に座頭虫が居るのだ。縁の下からは竈馬なんかが出て来る。土を穿てば蚯蚓だの螻蛄だのも居る。それに、気触れる草も生えているのだ。僕は皮膚が余り丈夫ではないから、下手をすると爛れて熱を出してしまう。そんな訳で土弄り自体が嫌いだ。当然、花の手入れなども得手じゃないのさ」

「そう云うが、椿は綺麗に咲いている」

放っておいても勝手に咲くのだと小山内君は云う。

「何だか、小莫迦にされているようで、花も嫌いさ」

「花が、君を莫迦にするのか」

「僕は生きるのに精一杯だろう」

それまで縁側の廊下に立って話していた小山内君は、座敷に入り、卓を挟んで僕の真向かいに座ると、顔を椿の方に向けた。

「彼奴等は健康そうに艶艶している。雨水吸って陽に当たるだけで、あんなに濃くて鮮やかな色になりやがる。一方僕は、何だか色が抜けているだろう。まあ陽にも当たらぬから日焼けせぬのは仕方がないが、滋養のあるものを色色と喰って、強壮のために煎じた薬を浴びる程に服んで、これでもうんと踏ん張って生きているつもりが、どうも黴か茸のように心許ない色艶だ」

「おい、あんな、濃緑や深紅の肌をした人間は居らんよ」

色相の問題ではないよと小山内君は云った。

「君の肌だって、ほら、強い色をしているし、瑞瑞しいじゃないか。色彩と云うより命が濃いのだ。あの赤と緑の深さは生命の深ささ。あの椿の中には、きっと生命がどくどくと脈打って流れているのだろう。一方僕ときたら、どうもどくどくと流れてはいないのだよ。血なのか気なのかは知らぬが、ちょろちょろと、まるで蛇口の栓を閉め損ねた水道のように、僕の命は勢いがないのさ」

小山内君は薄い唇を歪める。

「大体、あの椿どもは、ああやって生を謳歌するように咲き誇って、それで散りもせんのだ」

「また奇態なことを云うね。散らぬ花などないだろう」

「いいや散らない」

小山内君は忌忌しそうにそう云うと、身を乗り出して障子を半分閉めた。辛そうな姿勢だったので見兼ねた僕は立ち上がって、残りの障子を閉めた。慥かに開け放しでは寒い。

「椿と云うのは、花弁を散らさずにぽたりと落ちる。咲いた形のまま落ちるのだ」

「落ち椿という奴かね」

斬首のようなものだと小山内君は云った。

「打ち首とはまた旧い喩えじゃないか。しかも物騒だ」

「正に斬首の如きなのだから仕方がない。つまり、あの椿は衰えることなく、突然死ぬのだ。いや、花が落ちたところで木は枯れぬから、椿自体は死にもせぬのだけれどね。萎れて、色が抜けて、黒ずんで、乾いて、一枚ずつ花弁が減って行く、椿はそうした衰えの相を見せないのだ」

「落ちた花は萎えるし腐るだろうに」

「死んだ後に朽ちるのは当たり前だよ。生きているうちから草臥れて、衰えて行くことがないと、僕はそうしたことを云っているのだ」

なる程。それはそうなのかもしれない。

思うに植物は老いないのだと小山内君は云った。
「老木と云うじゃないか。古い木なんぞ、幾らでもある。老いた樹木だってあるだろう」
「樹木は何処までも育つのだよ。齢経りし木と云うのは巨きいだろう。何百年経っても育つのだ。水を断ったり幹を截ったり、まあ病にでも罹れば駄目になるのだろうがね。動物は、育ち切れば衰えて死ぬ。何処までも巨きくなったりはしないだろう。老人は大概縮んでしまうものさ」
そうかもしれない。
僕も高等学校よりこっち背が伸びないからなと云うと、僕は中学から止まっているよと小山内君は云った。
障子を閉めてしまうと室内は紗でも掛けたかのように煤けてしまった。
陽も高いと云うのに、明りを点けたくなる程だ。暗いねと云うと、家は暝いのさと小山内君は答えた。
「方角が悪いのか建て方がいけないのか、陽光の当たり具合が乏しいのさ。庭には能く当たるのだがね。朝陽も西陽も庭にだけは能く当たる。ところが、どう云う造りになっているのか、部屋の中は何時だって微曚いのだよ」
そう云えばこの家は何時だって暗い。玄関がまず暗い。廊下も暗い。

印象と云うのは恐ろしいもので、夕刻にばかり訪れているような気になっていたのだが、思えばそんな訳でもないのである。
窓もちゃんとあるのになあと云うと、風通しは悪くないのさと小山内君は云った。
「日当たりより風通しを優先したのだろうね。父は」
「これはお父上が建てた家かい」
「きっとそうだと思う。自分の家なのに心許ない返答だが、まあ僕が生まれる前のことだからね。母は後添えで、僕は父の晩年の子なのだ。祖父と云うのは、何でも東京の人ではなくて、どこだかの田舎の郷士だったらしいのだが、御一新の際に幕軍に加わって最後まで抵抗し、官軍に捕縛されて斬首されたらしい。板橋だかに首が晒されて、幼かった父はそれを見たそうだ」
「見たのかね」
「見たのさ」
「お父上はご自分の父親の晒し首をご覧になったのかい」
ご覧になったと云うのはどうかなあと小山内君は笑う。
「死骸だよ。しかも一部分だ。そんな大層なものではないさ。しかも罪人として晒しものにされているのだから、ご覧ずるようなものじゃないだろう」
「まあそうだが、いずれ時代錯誤な話だよ。真実かね」

「そうさね、今のご時世、刑死の骸など目にすることは滅多にないから、奇異な話に聞こえるけれど、僕は見た見たと繰り返し聞かされたからね。見たのだろう。父は十八年前に七十幾つで亡くなったから、勘定は合う。明治になった頃、十かそこらだろう。まあ、別に怖いものではなかったらしい。何だか黒ずんで、汚らしいなと思ったらしいよ。それに、もう少しきりりとした表情で死ねなかったのかと、何だか口惜しかったのだそうだ。祖父の首は、口を半開きにして舌かなんか半分出して、白目を剝いてね、巫山戯たような首級だったらしいのだ。まあ、路行く大勢が見る訳だからね。息子としちゃあもう少し、良い顔で死んで欲しかったのだろうがね」

斬首じゃ仕様がないよなあと小山内君は云う。

「どんな気持ちなのだろうね、首を斬られると云うのは」

「気持ちも何もないだろう。切られたことなどないから判らないが、痛いと思う間もないことは確かさ」

「痛くないかなあ」

小山内君の視線は僕を通り越した。

「切れる途中は痛くないかな」

「途中と云うのは判らないな」

「刃物が頸に当たり、然る後に切り取られる訳だろう」

一瞬のことだよと僕は云う。

「それこそ旧幕時代も初めの頃には、鋸挽きやら牛裂きやらとか云う拷問めいた刑罰があったそうだがね、そうやって、じわじわ切り裂くのならば痛いだろうけれどもね。おお、痛そうで考えたくもないがね。刀で打ち落とすなら一瞬だろう。剃刀で指を切った時だって、切れた瞬間は痛くないじゃないか。徐徐に痛くなるのだ。首の場合は、その徐徐に、がないだろう。もう死んでいる訳だからね。まあ、何かが当たったような衝撃はあるにしても、衝撃を味わう前に絶命してしまっていると思うよ」

そうなのかなあと小山内君は不服そうに云った。

「瞬間的に意識はなくなるのだろうか」

「当て身を喰らっただけで意識など飛んでしまうじゃないか。切れずとも、頸の後ろを鉄の棒で殴られたら昏倒するだろう。君の云う然る後は、ないと思うよ」

妙な話をするじゃないかと僕が云うと、小山内君は少しだけ頬を攣らせて、まあねと云った。

「まあ、刃物で刺されることならあるかもしれないが、首を落とされることなどないよ。日本刀を持った者も居ないし、持っていたってそんな腕前の者は居ない。大昔の話だね」

「昔、だろうねえ」

そうは云っても、小山内君にしてみれば遠い先祖の話などではなく、祖父の話なのである。謂わば手が届く過去である。そう考えるとそんなに昔でもないのだ。首を切り落として路肩に晒すなどと云う行いは今となっては凡そ考えられぬ蛮行であるのだが、そんな残酷な行為が半ば公然と、しかも身近な処で行われていたのだなあと、僕は改めて思ったのだった。

茶も菓子も出さずにすまないねと、小山内君は唐突に云った。

「いや、僕は構わないよ。こちらこそ前触れなしに押し掛けてしまって申し訳ないことだ。前を通り掛かったら懐かしくなってしまってね。三年くらい音沙汰がなかったろう。こっちも野暮用が重なって、年始の挨拶にも来られなかったから、随分と気にしていたのだよ」

「気にして、とは」

君の身体のことだよと僕は云った。

「休職したことは人伝てに聞いていたんだ。君の胃弱は先からずっとだったが、職場に出られなくなる程に悪くはなかっただろう。見舞いに行かなくちゃなるまいと思っていたのさ」

「休職した理由は、胃弱の所為ばかりじゃないのだよ」

色色とあってね、と小山内君は薄い眉を顰めた。

「気苦労が多いと胃の腑はすぐに駄目になる。身辺が紛乱していて、その上で教壇に立つと云うのは負担が多過ぎてね」

「まあ、慥かに忙しそうだ。一向に腰が落ち着かない様子じゃないか。いや、僕のことは良いのだ。何なら出直して来よう。まあ土産も持たずに来たよと云えば、粥しか喰えぬから要らぬなどと云うから、寝た切りを起こしてしまったかと余計に案じてしまったが、見れば元気そうじゃないか。そうして動き回れるのだから安心だ。次は手土産でも持って来ようじゃないか」

腰を浮かそうとすると、待ってくれと小山内君は止めた。

「出来るなら、帰らないで欲しいのだ」

「何故だね」

「いや、頼みがある。客人を使い立てするのは甚だ心苦しいのだが」

「何、構うものか。此処に来合わせたのも何かの縁だ。僕はもう用事は済んで、今日は何もすることがないのだ。出来ることなら何でもしよう」

それは助かると小山内君は云った。

「それならば少しの間、ここで留守居をしては貰えないだろうか」

「留守番くらいお易い御用だ。すると、君は出掛けるということだな」

「ああ。医者を呼びに行かねばならぬ。呼ぶにも、家は電話を引いていないのでね」

医者に行くのかいと問い直すと、医者を呼びに行くのだよと小山内君は答えた。
「呼びに行くとは、君がかかるのではないのかね」
「僕じゃないのだ。診断書を書いて貰わなくちゃあならぬのだ。いや、実はね」
妹が死んでしまったのだよと、痩せた友人は素っ気なく云った。僕は勿論聞き返した。すると友人は、いやさっき逝ってしまったのさと云った。
「丁度、君が訪ねて来る十分前くらいだ。息を引き取った」
「おい。悪い冗談は止せ。そんな与太は笑えやしないよ。妹さんって、佐弥子さんだろう」
「そうだ。佐弥子だ」
「佐弥子さんがどうしたと云うのだ」
だから死んだのだよと小山内君は平板な口調で云った。
「死んだ。佐弥子さんが」
「そう。その襖の先で」
小山内君は顔を奥の間に続く襖の方に向けた。
「おい、そう云うけれど佐弥子さんは慥か、四年前に結婚したのじゃなかったかね」
「そうだよ。だが二年半前に亭主が死んだ。そこでこの家に戻って来ていたのだよ」
「御亭主が亡くなられたのか」

まるで知らなかった。
そもそも、僕がこの家に寄り付かなくなったのは、彼女が嫁いでしまったからのような気もする。意識したことはなかったのだが。
事故でねと小山内君は云った。
「頭が潰れてしまったんだよ」
「頭が」
「それは酷い有り様だったそうだよ。まあ、僕は見ていないのだが、佐弥子は配偶者だからね、見ない訳にもいかないだろう。何しろ頭が潰れているから身許の確認も出来ない。服装や持ち物なんかは取り換えられるからね。警察に呼び出されて、佐弥子は遺体を検分させられた訳だが、それでね。余りの酷たらしさにすっかりやられてしまってね。夫だった訳だからね。人事不省と云う奴だ。それきり参っているから、まあ独り暮しも何だろうと云うことになって、葬式の後に引き取ったのさ」
「それなら」
何故報せてくれなかったのだ。そう云おうと思ったのだが、考えてみれば、僕なんかに報せる理由は小山内君の方には何ひとつないのだった。僕は小山内君の古い友達だというだけで、佐弥子さんと特別親しかった訳ではない。昔から知っていると云うだけで、それ以上の関わりはない。

僕は嫁ぎ先すら知らなかった。結婚式だって呼ばれていない。
戻って来ていたんだ。
「戻って来たはいいが、戻るなりに病み付いてしまってね。精神的な重圧もあるのだろうと慮り、大事を取って病院に入れた。入れたらどんどん悪くなってね。去年の夏まで、佐弥子はずっと入院していたのだよ」
なる程、家庭の紛乱とはそうしたことか。
それは慥かに、学校で悪童を相手にしていられる状況じゃない。
「それがね、愈々いけないということになってね。危篤というのかな。まあ病室の寝台で亡くなるよりは生まれ育った屋敷で逝く方が良かろうと、そう云う運びになってね。肉親は僕しか居ないし、最期をこの家で看取ってやろうと思って、病院を引き上げて次の間に寝かせた」
隣の部屋か。
それが八月頃のことだよと小山内君は襖を見乍ら語る。
「暑かったからなあ、去年の夏は。この忌忌しい庭は蚊もたんと涌くので、蚊遣りに困ったよ。いや、看病と云ってもそれ程大変なことはなくてね、寝かせておけば良いのだから面倒な手間はない。食事もね、僕も元元粥だったのだし、下の世話くらいかなあ。難儀だったのは」

看護人を雇おうかとも思ったのだけれどね、と云ってから、小山内君は何故か僕の顔を見た。
「医者の話だと、もう二三日しか保たないと云うことだったのでね、止めた。ところが佐弥子は生きたのだ。十日保ち一月保ちで、まあ良くはならないのだが悪くもならず、遂に半年近く経ってしまった。このままずっと生きるのじゃないかとも思っていたのだけれどね。まあ今朝も様子に変わりはなかったのだが、何だか突然容体がおかしくなって、ころりと死んでしまった。そしたら君がやって来たと、こう云う訳だ」
これも何かの縁なのだろうかと小山内君は云った。
「縁と云うか」
偶然なのだろうが。
「真実なのか」
「君を騙したって何の得もないだろうさ。そもそも君は、この線香の香りに気付かないのかい」
そう云えば香っている。
「線香を嫌う人も多いから、だからそこを開けたのじゃないか。少し寒いが堪えてくれと云っただろう」
云っていたかもしれない。

そうでなければそんな庭は見たくないさと小山内君は云う。
僕は観ていた。しかし。
「あの佐弥子さんが亡くなったとは、僕には信じられないよ。しかもついさっきと云うのだろう。君を疑う訳じゃあないが、どうにも作り話めいているよ」
「君も疑い深いなあ」
小山内君はそう云ってから腰を浮かせ、隣の部屋を仕切る襖をすっと開けた。
隣室はいっそうに昏かった。その昏がりに布団が敷いてあった。線香の香りが漂って来る。
布団から、足の先が覗いていた。
驚く程に、白い爪先だった。白いと云うより透けている。血が全部抜かれてしまっているようだった。
まるで、羽化したての蟬だ。
「死んでしまったよ。息もしていないし心臓も止まっている。動きもしないし喋りもしない。瞬きすらしない。身体だって魚のように冷たい。こういうのを死んでいると云うのだろう」
それは、死んでいる。
死んでいるだろう。

僕は彼女の足をもう一度観た。綺麗な形の足だった。蠟細工のようだ。小さな透き通った爪が行儀良く並んでいた。何もかも抜けてしまった、抜け殻のようだ。抜け殻の方がこんなに白いなら、抜けた魂はもっともっと透き通っているのだろうか。
ただね、と小山内君は云った。
「このままという訳にはいかないのさ」
「いかないだろうが、そうか。診断書と云うのは死亡診断書なのか」
「そう。僕も少し狼狽してしまって、先ず何をしたらいいのか考えてしまった。坊主を喚ぶのか、それとも近所の人か、親類に連絡したものか、葬儀の手筈を調えるのが先か、いや警察かとね。そんな時に君がやって来たのさ。混乱していたから、どうしようかと思ったが、君の顔を見たら落ち着いてね。そこで、此処に待たせて、もう一度佐弥子が死んでいるのか確認し、それで先ずは医者だと、そう思い至ったのさ」
「先ずは医者だろうね」
「医者さ。まあ、この状態で」
小山内君は静かに襖を閉めた。
「死んでいないと云うことはないのだろうが、それでも素人判断に違いはないよ。お医者にきちんと診立てて貰って、凡てはそれからだと、こう思った。そこで」
「戻ってみれば、僕は庭に見蕩れていたと云う訳か」

そう云うことだよと小山内君は静かに云った。

「どうだろう。久し振りに来てくれたと云うのにこの有り様でね。屍と二人きりで留守番と云うのは気分の良いものじゃないだろうが、引き受けてくれるだろうか」

勿論だよと答えた。

僕は、昔から佐弥子さんが好きだったのだから。

死んでしまったんだなあ。

小山内君は二重回しを羽織って、なるべく早く戻るからと云って出て行った。

暫くはただ座っていた。

他人の家なのだし、用もないのに歩き回ると云うのも変である。

口を利くこともない。僕以外には誰も居ないのだから、これも当たり前である。だからただ座っているしかなかった。それでも、十分くらいで僕は、座っていることに飽きた。

否、飽きたというのは中たっていないかもしれない。

何かしてみたくなったと云うのが正しいのだった。僕は先ず部屋を見渡す。

久し振りに訪ねた家だが、子供の頃から幾度も来ているのだから、見慣れた情景ではある。多分、昔から全く変わっていないのだ。いや、いないと思うのだが、どうも少し覚束ない。

例えば茶簞笥などは見覚えがある。あのくね曲がった木目は、慥かに記憶にある。帯金具や縁金具、引手の黒さも憶えの通りだ。漆喰の壁の罅も、欄間の透かし彫りも憶えている。一体何を彫ったものか幼い頃はまるで判らなかったのだが、今見れば水流と蓮の花なのだ。

でも、目の前の卓には余り見覚えがない。新しいものとも思えないけれど、少なくともこの座敷にはなかったのではないか。それ以前に、僕にはさっきまで眺めていた庭の記憶がない。

それに、小山内君はこの家の裡は構造上暗くなるのだと云っていたけれど、そういえば子供の時分には暗いと思ったことなどなかったようにも思う。微暗い印象は長じてから訪れた際の記憶に基づくものなのだ。だからこそ夕暮れにばかり訪れたように勘違いしていたのだろう。幼い頃はこんなに暗くはなくて、普通だったような気もする。建て方立地の問題ならば、そこは変わらぬ筈である。

線香の香りがする。

欄間を抜けて漂い来るのだろう。

何だか、電燈を点けたくなるくらいに、昏い。

部屋を見渡して、次に僕は立ち上がってみた。

序でに電燈を点けようと思ったら、障子が開いた。

おやと思って顔を向けると、椿の花を背に背負って佐弥子さんが立っていた。
「あらまあ、西宮さんじゃありませんか」
佐弥子さんはそう云った。
それから、なんてお懐かしいのでしょう、何年振りになるのかしらと云った。
云った後佐弥子さんはそのまま廊下に座った。
君は。
僕は余り驚かなかった。
別にゆうれいには見えなかった。
「どうなさったのです」
「どうもしません。ここで留守居をしていろと云われた」
「留守居。それじゃあ兄とは、お会いになられたのですね」
「留守居を命じたのは兄上ですよ。勝手知ったる他人の家とは云うものの、幾ら僕が厚かましくても黙って上がり込んで勝手に留守番を気取ったりはしませんよ。それでは白波だ。僕は、ちゃんと声を掛け、玄関から入れて貰って、それで座っていたんです」
あら西宮さん相変わらずですわねと云って、佐弥子さんは笑った。
昔と同じ声だった。

「兄は病院に行くと云っておりましたけれど、真逆お客様をお待たせしたまま行ってしまうとは思ってもいませんでした。お茶もお出ししないで、放りっ放しは酷いですわ。大変失礼致しました。いいえ、誰も居ないと思っておりましたので、驚いてしまいましたの」
「驚いたのは僕の方ですよ。君は」
君は。
佐弥子さんは凝乎と僕を見た。
「何だか、懐かしくって泪が出そうですわ」
「僕なんぞを見て泣くことはないでしょう。聞けば、あなたも色色と大変だったそうだけれど、身体の方は良いのかい」
「私は大丈夫ですわ」
そう云うと佐弥子さんは、小山内君が閉めた障子をまた全開にして、それから僕の向かいに座った。
淡い薄紫の無地の着物が、何だか濃く映えてしまう程に、やっぱり佐弥子さんは真っ白だった。
この人は。
子供の頃からこんなに白かっただろうか。

ほんとうに白い。白粉を塗ったような白さではない。水に放した白玉のような、透明な白だ。中心の白さが表面に透けているのだ。血が通っていないような、それはそれは儚い白さだ。

つくりものみたいだった。

「御結婚なさったのでしょう」

先ずそこから確かめなくては。

佐弥子さんは短くええ、と答えた。

お祝いも云わず仕舞いですと云った。

「でも不幸もありましたから」

「ああ、御主人が亡くなられたのだそうですね。本当に、何も知らなかったものですから」

「余り」

お報せしたくありませんでしたからと佐弥子さんは云った。

「特に、西宮さんには」

「事故ですか」

「石塔の下敷きになりました」

「石塔ですか」

「ええ。品川に明治維新の時に処刑された幕軍の方方の慰霊碑とやらを建てることになったのです」

「慰霊碑ですか」

「ええ、首を斬られた人達の慰霊碑ですわ。亡くなった主人は土木関係の仕事をしていたもので、その建立を請け負って、それで立ち合っていたのですけれど、縄が切れて、大きな石が横倒しになったようなのです。その下敷きになったんです」

「それは惨しいことです」

「頭がすっかり潰れてしまいましたの」

それは、本当だったんだ。

「警察の病院の霊安所で見せられました。肩から下は無傷だったんですけれど、頸から上がないんです」

「ないのですか」

「ええ、頸が潰れていて、そこから上がありませんでした。もう、すっかり潰れてしまって、回収したのは千切れた肉片と砕けた骨片だったそうで、それもアルマイトの容器に入れてあったのですが、見た処で判りませんから見ませんでしたわ」

あれは、痛いのでしょうかと佐弥子さんは独言のように云った。

「頭が潰れると云うのは、痛いのでしょうか」

「さあ。まあ、不謹慎な云い方かもしれませんが、痛みはなかったのではありませんか。手足を挟まれたとか腰を砕かれたと云うのなら、これは痛いし苦しいのでしょうが、頭だとすれば、痛みや苦しみを感じる間もなかったでしょう。一瞬です」
「そうでしょうか。潰れる途中は、痛くないでしょうか」
「途中というのは」
何だろう。
「一瞬ですから、途中はないですよ。御主人は苦しまれなかったと思います。変な云い方ですけれど、それは不幸中の幸いですよ」
いや。
幸いな訳があるか。
僕は何だか釣られてしまって、豪くいけないことを云っている。そんな残酷な死に方が幸せである訳がない。佐弥子さんはその時の衝撃で人事不省に陥ったのだと、小山内君は云っていた。それは当然のことだろう。それなら、こんな話は。
僕はいつの間にか下を向いていて、そこで顔を上げた。
佐弥子さんは庭の方に顔だけを向けて、眼を細めていた。
ずっと遠く、僕には見えないような遠くを見ている。
「そうですか。あの人は痛くなかったんですか」

佐弥子さんはそう呟いた。
「頭がなくなってしまったのだから、それはさぞや痛かったのだろうと、そう思ったのです。擂り鉢で擂り潰されたみたいになっていたものだから、それはもう大変な痛みだったのじゃないかと思っていたのです。可哀想にそんな死に方をして、何も、人生の最後の最後に、そんな痛みを味わうことはないじゃありませんか」
「まあ、そうです。でも、それは瞬間で終わってしまった筈です。御主人は、もしかしたら」
死んだことすら気付かなかったかもしれない。
「あの人は最期に何を見たのでしょう」
何も見なかった。
僕はそう思った。
何か見たとしたって、それが何かを認識する前に、その人はもう死んでしまっていただろう。愉しいことも嬉しいことも、悲しいことも虚しいことも、一瞬で何もかもなくなってしまった筈だ。まるで、電球が切れるかのように、ふっと消えて、
何もかも真っ暗に。
この座敷はどうしてこんなに暝いのだろう。まだ昼間じゃなかったか。これではまるで夕方だ。

佐弥子さんは白いから見えているけれど、土気色をした小山内君なら紛れて見えなくなってしまうかもしれない。それ程に暝い。

見えたのだとしたら想い出ですよと僕は云った。

懐かしい風景やら、愛しい人やら、美しい花やら、何かそうしたものですよ。その方がいいじゃないですか。

「自分の血を見たのじゃないかしらと思っていました」

「自分の血ですか」

「だって潰れてしまったのですもの」

あの人の頭、と佐弥子さんは云う。

「頭がなくなってしまったのですわ。舎利頭が割れて、中味が全部出てしまったのです。瞬間、それが見えたのじゃないかと思うと」

せつなくってねえ。

「自分の頭の中味なんて、そんな汚らしいものを見てしまって、それで死んで行くなんて、悲しくはないでしょうか。恐ろしくはないのでしょうか。私はどうしてもそんなことを考えてしまいます。どうなのでしょう西宮さん」

そんな。

「そんなことはないですよ」

「ないですか」

「御主人は痛みも感じなかっただろうし、汚らしいものも見なかったでしょう。何の前触れもなしに、突然終わられてしまったんですよ」

それなら良いけれどねえ、と佐弥子さんは、今度はやけに落ち着いた声で云った。科垂れた姿勢が、迚も綺麗だった。

その白い首が。

細い、透き通った頸が。

「あら、申し訳ありません。お茶も出さずに失礼ななどと云っておき乍ら、私まで何もお構いせずにおりました。本当にいけませんわ」

「いや、構わんでください。来るとはなしに、気紛れで来てしまっただけです。こうして懐かしい人とお話しが出来るだけで僕は充分ですよ」

懐かしい。

「それにしても兄さん、随分遅いようですわ」

「病院は近いのですか」

さあ、判りませんと佐弥子さんは首を傾げる。

「兄は、相当悪いのですよ。入院するか、然もなくばせめて往診して戴けば宜しいのにと申し上げているのですけれど、どうしても聞いてくれません。こんな刻限まで」

「こんなって」
もう陽が暮れているのかしら。
「寒いですわね」
「寒いですか」
寒いのだろうか。
「この家は火の気がないので、迚も寒いのですよ。こんな家に居ると」
魚のように冷えてしまいます。
それは。
死んでいるからじゃないのかい。
「佐弥子さん」
隣の部屋に誰か寝ていますか、と僕は尋いた。
「扨、寝ていると云っても、この家には」
あなたとわたししかおりませんけれどもねえ。
そうさ。屍と二人切り。
君はもう、死んでいるのじゃないのかい。
そんなことを思って、何故か逸らせていた視線を戻すと、佐弥子さんはいつのまにか部屋の隅に居た。

「どうしたのです」
「いいえ、お茶でも淹れましょう」
佐弥子さんはそう云うと、布団が敷いてあった部屋の襖を開けて、真っ暗な隣室に消えた。襖を閉める時にほんの僅か布団の端が見えた気がした。線香の香りもした。
また、一人になった。
暫くはそのまま座っていた。
小山内君はどうしているだろう。ちゃんと病院へ行ったのだろうか。やっぱり大分悪いのだろう。
僕は、どういう訳か両手で自分の頭を押さえた。
潰れたり、落ちたりしては大変だからだ。
僕は、生きているのだろうなあ。
庭に目を遣る。庭には椿が咲いていて、その横の植木鉢を置く木製の台は燻んだ灰色だ。台の上には何も載っておらず、欠けた植木鉢は地べたに並んでいて、雑草が少し生えている。椿は艶艶している。葉は厚く色も濃く、花は毒毒しいまでに紅い。台の方はもう風雪に曝されてすっかり傷んでおり、触ると壊れるのではないかと思える程だ。朽ちている。色も脱けている。雨に濡らされ陽に乾かされ、風に撫でられ雪に苛められてもう瀕死の体である。

ああして、ゆっくり朽ちて行くのもいいだろうなと思う。
突然終わってしまうより、その方がいい。小山内君は椿を嫉(ねた)むが、僕はいきなり首が落ちるような最期を迎える椿を余り羨ましいとは思わない。僕は、のろのろと草臥(くたび)れて行きたい。
外はまだ明るかった。
昼間だ。
それでも、家の中はもう真っ暗だ。
僕は。
いつまで此処で、留守番をしなければならないのだろう。
佐弥子さんはお茶を持って来るだろうか。いいや、来やしない。来る訳がない。この線香の香り。家中に染み渡った屍(しかばね)の匂い。魚のように冷えている、真っ白な、透明な皮膚。
隣の部屋では佐弥子さんが死んでいるのだろう。
兄である小山内君が云うのだから、間違いない。
そう思ったその時。
一斉に。
庭の椿が落ちた。

「噫(ああ)」
小山内君も死んでしまったのだなあと、僕は思った。
僕はいつまで留守番をしていれば良いのだろう。
小山内君は帰って来るのだろうか。
僕は、帰れるのだろうか。
この庭のある家から。